この部屋、誰の部屋。

まさらっき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この部屋、誰の部屋。

【Ｎコード】
Ｎ４８４３Ｌ

【作者名】
まさらっき

【あらすじ】
とある夏の日。一本の電話が友人の引越しを知らせる。
そして始まった、忘れられない顛末。
この物語は・・・・・実話です。

（前書き）

小説というジャンルとは少し違うかも知れません。
昔体験した事をブログに書いた事がありまして、ひょんな事でその時のテキストが出てきました。
そろそろ怪談の季節。
あくまで私個人の体験談になりますのでオチは無いです。実際の話はそんなに怨霊染みたモノでは無いのでしょうね。

当時２０歳だった私。その日は仕事も休みで暇を持て余していました。
お昼を少しまわった頃だったと思います。私の家の電話が鳴りました。まぁ当時には携帯電話なんて稀な時代でしたので、いわゆる家電と言う奴ですね。

トゥルルルルルルル

電話に出てみると、友人、仮に吉田としましょう。その彼でした。彼が学生時代に私の会社でアルバイトをしていて知り合った。歳も近かったので、割りと頻繁に遊んではいましたね。専門学校を卒業した彼が就職をした為にバイトは辞めましたが、それでも関係は続いていました。

「久しぶりだなぁ。どしたの？」

聞くと彼は「今日引越ししたんだ。今、部屋に着いたところ」

ビックリしましたね。久々の電話でいきなり引っ越したと言われるとは。場所を記載してしまうと何かと問題もありますのでココでは言及は控えます。まぁ私の暮らす街から車で2時間と言った場所でした。
仕事の関係で其方と此方を行ったり来たりの彼にとっては、どちらに住んでもあまり大差は無いのでしょう。
会社が家賃を少し負担してくれると云う事で引越しを決めたとの事でした。

「そっかぁ。どの辺り？オレもたまに仕事で行くから、多少は場所わかるよ」
会話の中で、新しい部屋の住所や部屋の事等を話していると・・・・・聞いたことがあるんです。ですがそのマンション、余り良い噂は聞かなかったんですね。
まぁよく有る話ですけど、出る。らしい？と、まぁ有名なマンションでした。
そうかと言って、コレからソコで生活を始める彼に聞かせても気持ちの良い話では有りませんし、夏の昼日中と云う事もあり、その時は気にも止めずに、「へぇぇ～」などと軽い話をしていましたが・・・・・ん？

会話の途中からおかしな事が起こりました。
「なぁ。お前の部屋に誰いるの？」
私の問いに吉田は不思議そうに
「誰も居ねぇよ。まだ荷物も出してないのに誰も呼べんて」
「ぁそぅ・・・・・・」
不思議でしたね。私の耳もとの受話器から聞こえる彼の声に混じって、女の人の声が聞こえた様に思えたのです。
気の所為かとも思ったのですが、その女性と思われる声の様なモノはだんだん大きく聞こえてくる。

「おっかしいなぁ・・・ほんとに誰も居ない？なんか女の声聞こえるんだけど」
「女なんか居ないって！気持ち悪いこと言うなってば！何も聞こえないよ」

その間にも声は次第に大きくなってきます。ただよくは分からないんです。
話してる？叫んでる？独り言？・・・よく解らないし、なぜかはっ

きりとした言葉として聞き取れない。

「マジで居ないか？テレビ観てる？窓とか開いてない？外で女とか騒いでない？」

「聞こえないって。大体テレビなんか設置もまだだし、ここ８階だぜ？誰が外で騒ぐってよ。何が聞こえるってよ？」

逆に聞かれましたけど

「何言ってるって聞かれても解んないんだけど、なんか聞こえるんだよなぁ。混線でもしてんのかなぁ」

「そうじゃないの。ほんと、マジに誰も居ないし、聞こえないから」

「ん～～。ならそうか～。なんか反響してる感じもあるからバスルームとかそんな感じなんだけど、電話の調子かなぁ」

結局、私たちの会話はその様に進行し、電話の不調で一件落着。また今度！という感じで受話器を置きました。

電話を切った後、もうそんな会話があったことも気にせずに、私はまた暇を持て余し、本などを読んでいました。

暇で暇でしょうがありませんでした。本当に・・・・・・・・・１０数分後に再び電話が鳴るまでは。

その電話が運び込んできた体験は、今でも忘れられないモノになってしまいました。

トゥルルルルルルル・・・ガチャ
「はい」
電話を取ると１０数分前に話した彼でした。でもその電話を取るとブーー！と音が
「何お前、公衆電「おまえさぁ、今日お前の部屋に泊めてくんねぇか！」はぁ？」
私は何を言っているのかよく判りませんでした。
今日引っ越して、あっちに居る彼をなぜに私の部屋に泊めなければならないのでしょう。
「だってお前、今ソッチだろ？引越しして荷物ほどくだけじゃん。布団だけ適当に出して寝りゃいいじゃん」
別に泊める事を拒んでいる訳では無いのですが、意味がよく判らなかったので私がそう答えると
「そんなんじゃないんだよ！オレもうこの部屋引っ越すからさ。今日だけで云いから頼むって！」
さっき引越しの連絡を貰って１０数分後にまた引越しのお知らせ。
「お前何言ってんの？？そこに引っ越したんでしょ？荷物もほどいてないとか言ってたろ」
でも彼は私の言葉が聞こえないかの様に「頼む！頼む！」の一点張り。
尋常ではない様子に休日気分だらだらモードの私もさすがに不安を覚えてきました。
取り敢えず彼が泊まる事を了解すると
「すぐに迎えに来てくれ！高速代とかガソリン代とか全部払うから

！大至急来てくれ！」

反論の余地もない迫力に圧されるままに、彼の云う通り、私は高速道路を使い車を走らせました。
結構急いでのですが、私が着いたのは、１時間半位後でした。
場所は先ほどの電話で見当が付いてましたので迷わずにたどり着けたんですが、到着してみると道路にＫの姿が！
彼、私に電話したあともずっと外に居たんですね。１時間半も、ただぼーっと立ってた。どう考えても普通じゃない。

「よかったぁぁ」

車をおりると今にも泣きそうな彼が走り寄って来て私に礼を陳べていました。

「いったい何がどうしたんだ！訳解らんぞ！」
「ほんっとにごめん！後で話すから、今日だけほんとにごめん！」

問答続けても仕方が無いので「取り敢えずオレん家行こ。車ででも話聞くから」
そう言って車に乗ろうとすると吉田が
「お願いあんだけど・・・・・・部屋に鍵とバック置いてあるんだけど取って来てくれない。リビングの真中にあるからすぐ判ると思うし、鍵とかも閉めて来てくれたら」
「お前ね・・・パシリじゃないんだから！自分で行けや！！」
さすがに少し頭に来ました！こんな場所まで迎え来させておいて、さらに部屋まで鍵とバックを取って来いとは！！
でも彼はそれでも尚「ほんとにごめん！埋め合わせはするからほんとにお願い！オレもうあの部屋駄目なんだって！」

もう必死の形相で頼む彼に、さすがに嫌とは言えなくなった私は渋々彼の部屋へ鍵とバックを取りに行く事にしました。

その時点においてはさすがに私もピンとは来ていました。噂の幽霊マンション。私にだけ聞こえていた女の声と怯えた友人・・・・・

（なんか出たかなぁ）

実は私はそれまでにも多少の経験、というか免疫というか、未体験と云うわけではなかったので、それほどの恐怖も無くそう考えながら彼の部屋へと向かいました。

部屋まで着きドアノブを回すと・・・やはり開いている。よほど慌てたのでしょう。

中に入ると本当に引越ししたばかり、と言うより最中と云った感じで箱やケースのままの荷物だらけでした。

ただ、この部屋に入った時に部屋の空気がなぜか異質に感じられました。

なにかこう・・・・・重いというか肌に纏わり付く・・・建物に入ってからも感じないではなかったのですが、より一層と言った感じでしょうか。

取り敢えず彼の言う通り、鍵とバックはすぐに見つかり部屋を後にしようと部屋を歩いていると、ふ、とさっきの電話の声の事が気になりました。

（あいつの様子も変だし、絶対なんかあんだけどなぁ・・・なんだ？）

必要に探すでもなく、ちらちら辺りを観察しながら部屋を歩き、帰ろうと玄関向かう途中に脱衣所が目にとまりました。

（さっきの声もなんか反響して様な感じだったよなぁ）

私はゆっくりと脱衣所に入って見渡すと・・・・・・何もない。
でも、なんか先ほどから感じている、空気と言うか空間と言うか・・・室内い感じる違和感が増していく様に感じました。

その横にあるバスルームに目をやると電気が消えていて暗くなっていました。
中を見て行こうと電気のスイッチを入れると

（なんだぁ？）

よくは解らないが曇りガラスの向こう側。ガラス越しのバスルームが妙な感じになっている。

なにか・・・・・・黒い・・・・・・？暗い部分・・・・？？なんだ？

私はバスルームのガラス戸を一気に開けました！

「うわっ！！」

一瞬にして全身が凍りついたように固まりました。体中に鳥肌が立ちましたね。
そこで私が見たもの・・・・・・・・・・・・・

髪でした。

ただ髪。ただただ髪

髪髪髪髪・・・・・・

バスルームの浴槽はもちろん洗い場・壁・蛇口。もうびっしりの髪でした。
しまも水で濡れている訳では無い様な、それでいて艶がある様な・・・・一面の髪の毛でした。

（ここはヤバイ！！この場所は嫌だ！！）

それだけが頭を支配しました。
一目散に部屋から飛び出し、自分を抑えながら鍵を閉め、エレベーターを待てずに非常階段を猛ダッシュ！
マンションから飛び出した時の様子で吉田も事態を瞬時に把握、二人で車に飛び乗り一目散に車を走らせました。

暫くして車が高速に入り、我々も少し落ち着きを取り戻したのか、漸く話が出来る位にはなりました。

車中で彼が私に「お前・・・・・・・バスルーム・・・・・・」
「ああ・・・・・・有った」
思い出したくも無い光景を思い出してると、彼は少し驚くんですよ。
「有った？居たでしょ？」
またおかしな事を言う。
「居た？有っただろ？髪だろ？」
彼は体ごと私に向き合うと
「女の話だよ！居ただろ！真っ暗なバスルームに女がコッチ見・・・
・・・髪？」
「女？」

・・・・・・・・
・・・・・・・・

彼が言うには、私との電話を切った後、私の言葉が気になった彼は
部屋を見て回ったそうです。
とくに誰もいない。居る訳は無い部屋を一通り見て周り、（なんだ。
やっぱり何も無いじゃないか）と洗面所に向った。
トイレを済ませ、手を洗っていると・・・・・背後のバスルーム
のガラス戸が少しだけ開いていたそうです。私が行った時には確か
に閉まっていました。
（？？）と彼は鏡越しにそのガラス戸の隙間を見ていると・・・・
・

自分を見ている目が在ったそうです。
電気の付いていない真っ暗なバスルームから覗き込んでいる目。
少しだけの隙間に洗面所の灯りが射し込み、それは女の様だったら

しい。

彼はそのまま逃げ出し、今に至ると言う事でした。

今となっては、ソレが誰で有るのか、私の見たアレがなんであったのかは解りません。

ただ、そのマンション。

事実、事故が相次ぎ倒産した総合病院の跡地に建てられた場所で、高層マンションであり立地条件も申し分無いにも関わらず。

４ＬＤＫで家賃が４万を切ると言う破格のマンションでした。無論・・・・・・頻繁に住人は変わりました。

それから何年かしたあと、私は偶然にもそのマンションの１階に入っている会社と仕事上の付き合いを持ちましたが、その会社は夕方４時には必ず終業となっていました。

理由？

「あぁ。ウチの会社のビル、夕方以降は無理だから」

無論、昼間だから平気。と言う事も無いそうですが、明るい時に大勢で居るには何とか。と言う事でした。

今現在はと言うと・・・・・・未だにそのマンションは立っているらしいです。入居の程は定かではありませんが。

おわり

（後書き）

息抜きの駄文、失礼致しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4843l/

この部屋、誰の部屋。

2010年10月28日08時26分発行